

まだまだ暑い!!

お盆の期間、少し若干涼しめの日が数日ありましたか、その後再び暑い日が戻ってきた様子の今日この頃、

皆様いかがお過ごしていらっしゃいますでしょうか?

梅雨時期に、今年は雨が多かった、少なかったといった年による違いはあったりしますが、夏の暑さだけは、そんな年による違いは全くなく、毎年変わらず暑い!ですよね。

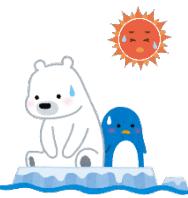
そんな中、やはり注意しなければならないのが『熱中症』です。

2024年の熱中症による死者数はなんと2,000人を超えております!

2023年は1,651人とのことですので、これだけ注意しましょう!との呼びかけがあつても増えているのです。

厚生労働省の公表データによると、1年間の熱中症の死者数は1980年代まで2桁台が多かったです、90年代に入って増加傾向になり、94年以降は3桁台で推移。2010年に初めて1千人を超え、2018年以降はほぼ毎年1千人超になっています。暑さが厳しさを増し、2018年以降はおむね、気象庁の観測地点のうち延べ3千地点以上で35度以上の猛暑日を記録している状況です。

やっぱり気温が年々上がっているのが要因なのです。



そして近年、海面水温がどんどん上昇しているそうです。

昔は海面水温が低かったのが、今は海面水温が高く、その影響で9月も暑くなっています。  
理由は、まさに『温暖化』の影響のようです。この温暖化の主たる要因である『温室効果ガス』『CO2』。これらが今後もが増え続けていくと、そう遠くない近い将来「40°超え」も起こり得るそうです。この温暖化対策が、改めて本当に重要な状況なのです。

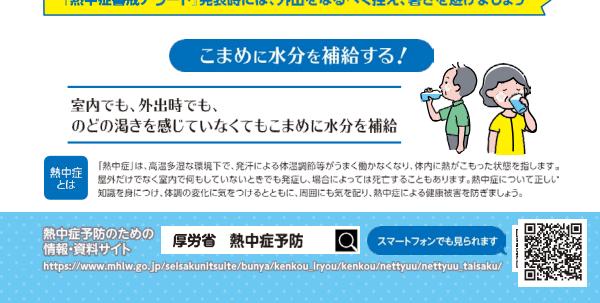
このまま温暖化が進むと、10年後には熱中症での死者数が1万人を超えるとの説もあります。

ちなみに交通事故による死者数は、年間約2,600人。そして一応年々減っています。  
もはや交通事故で亡くなるリスクよりも高くなってしまう日常が、現実味を帯びています。

そんな中、自分達ができる対策として「遮熱性の高いカーテンをつけること」が挙げられています。

窓から室内に伝わる熱が遮られ、エアコンの冷気が逃げにくくなり、電気の使用量が減り、節約にもつながります。  
その結果、CO2の排出量が減るということです。できる範囲で、自分の身を守る工夫、そして出来るだけ今後の将来も見据えた動きをしていくことが大切なことだと思っております。皆様、引き続きお気を付けて夏を乗り越えてくださいね。

## 熱中症予防のために



### 熱中症の症状



応急処置をしても症状が改善されない場合は医療機関に受診しましょう

### 熱中症が疑われる人を見かけたら(主な応急処置)



自分で水が飲めない、喉がおかしい時は、ためらわずに救急車を呼びましょう

暑さの感じ方は、人によって異なります。  
そのため、体温や暑さに対する慣れなどが影響します。

高齢者や子ども、障害のある方は特に注意が必要。

室内で熱中症予防!  
暑さを感じても水分を補給し、エアコン等を使って温度調節するよう心がめましょう。

厚生労働省

## I やなせ たかさんの「アンパンマン」 戦死した弟の遺言と共に生きた生涯

### 連続テレビ小説「あんぱん」

逆転しない正義「アンパンマン」にたどり着くまでの愛と勇気の物語がNHKで放送されている。

NHKの朝ドラ「あんぱん」は、「ドクターX～外科医・大門未知子～」シリーズなどのヒット作を放ち続ける中園ミホさんがオリジナル脚本を手掛ける。朝の連続ドラマの第112作目。

69歳で大ヒットとなった国民的アニメ「アンパンマン」を生み出した漫画家・やなせ たかさんと妻・暢(のぶ)さんをモデルに、激動の昭和を生き抜いた夫婦を描いている。

「正義」はある日突然、逆転する。

“逆転しない正義とは献身な愛だ”やなせ たかし作「アンパンマン」に貫き通した思いがあった。

そこには、やなせ たかさん自身の戦争体験と、海軍少尉に志願し23歳で海の底に沈んだ弟への思い。

弟の千尋(ちひろ)さんが水測員として乗船していた駆逐艦「呉竹」が、フィリピン沖のバシー海峡でアメリカの潜水艦「レザーバック」の電撃により沈没し、千尋さんは戦死した。遺体は発見されず、遺骨として、白木の箱に「柳瀬千尋」と書かれた木札一枚が入った状態で軍から送られてきた。

この時代、多くの若者が国のために軍務に就いた。それは自分にとって「正義」だと思い込んでいた人が多かったのだ。

やなせさんの弟への痛切な思いがあった。戦後80年の今、やなせさんが残したメッセージを見つめてみた。



やなせさん自身も1941年、22歳で徴兵となり中国に行った。

配属されたのは暗号班や占領地の住民を手なづける宣撫(せんぶ)班。戦闘はなく、銃を持つことはなかった。しかし、戦地ではマラリアになり、生死をさまよった。

やなせさんは当時、「正義のために戦うのだから、生命を捨てるのも仕方がないと思っていた」と自著「アンパンマンの遺書」で振り返っている。

しかし、生き残り、“正義のための戦いなんてどこにもない”ことを骨身にしみて知った。

「本当の正義は人を殺すことじゃない。そこにひもじい人がいればその人を助けることだ。」と後のインタビューで語っている。

1969年の元祖「アンパンマン」では、戦争が続いて野も山も焼けただれた国に、アンパンマンが飛んでいき、あんぱんを子どもたちの上に落としている。戦争で犠牲になるのは、いつも子どもたちだからだ。

今、やなせさんが生きていたら、ガザで飢えている子どもたちのところへアンパンマンを飛ばしてあげたい！ときつとうだろう。

やなせさんは、年々戦死した弟への思いが深くなっていた。

晩年「アンパンマンの顔を描くとき、どこか弟に似ているところがあって、胸がキュンと切なくなります」と語っていたと当時インタビューした記者が語っている。

弟・千尋さんは、戦地に赴く前に兄に会いに行つた。

「僕はもうすぐ死んでしまうが、兄貴は生きて絵を描いてくれ。」が遺言となった。

やなせさんは、詩集「おとうとものがたり」の中で「君の青春はいったい何だったのだろう」と問いかけている。

～アンパンマンのテーマは～

アンパンマンは食べること、助け合うこと、そして自分の犠牲を厭わない愛と優しさをテーマにしている。

これは、やなせ たかさんの戦争体験や戦後の食糧難を経験したことから生まれた平和へのメッセージだ。

～やなせ たかさんの最後の言葉は～

「何のために生まれてきたの？」

この言葉は“アンパンマンの主題歌”の一節であり、彼の人生哲学を象徴する言葉として知られている。

やなせ たかさんは2013年10月13日94歳で亡くなった。亡くなる直前まで「何のために生まれてきたの？」という問いを、繰り返し周囲に問い合わせていたと複数の記事で伝えられている。

この言葉は彼の創作活動の根底にある、人を喜ばせること、そして自己犠牲の精神を表していると言える。

やなせさんは弟を戦争で亡くしており、その喪失体験が、人を喜ばせること、そして「自己犠牲」というテーマを追求する原動力になったとも言われている。

彼の作品には常に「他者を思いやる心」や「困難に立ち向かう勇気」が込められており、それは彼の最後の言葉にも通じるものがある。

さらに、やなせさんは亡くなる直前までアンパンマンの絵を描き続け、被災地への支援活動も行っていた。

彼の創作活動は、まさに「人を喜ばせる」という彼の人生哲学を体現したものであり、その精神は彼の作品とともに今も多くの人々に受け継がれている。

アンパンマンの顔のイラストを見て、このキャラクターを知らないという子どもはいないと言い切れるほど、それぐらい子ども達の世界に圧倒的な知名度を誇って存在するのがアンパンマンです。

### ～妻・暢さんは～

漫画家として一人立ちを目指すやなせさんを暢さんはこう励ました。《なんとかなるわ。収入がなければ私が働いて食べさせるから。》と、限界まで働くやなせさんを支え続けていたのが暢さんだった。

「仕事以外はすべてカミさんに頼っていた。散髪も彼女にしてもらい、病気になると全力で看病してくれた。」と。1993年11月ガンのため逝去した暢さん。子どももいなかつ夫婦にとって、アンパンマンはまさに“子供”だったという。暢さんの死から30年、たかさんの死から10年“家族”的物語が時を経て再生されている。

## II 映画「国宝」異例の大ヒット 芸は磨かれ 飛躍し深まる



歌舞伎に限らず、演劇に関わる書籍は、どうしても部数が伸び悩むという。あるノンフィクション作家に、「演劇書は売り上げが1桁落ちる」と教えていただいた。読むと見るとは違うとはいえ、歌舞伎を主題とした映画「国宝」の大ヒットは、異例中の異例といえるだろう。

映画の大ヒットもさることながら、そのおかげで原作小説が、文庫本で120万部を超えるベストセラーになったことが、何よりうれしい。国宝の著者 吉田修一は、芸術選奨文部科学大臣賞と中央公論文芸賞の2冠に輝きながら、あまり動かなかった部数が、映画のおかげでこれだけ跳ね上がったという事実にも考えさせられる。

上方歌舞伎の世界を舞台に、主人公・喜久雄(吉沢亮)とその生涯のライバル・俊介(横浜流星)の50年にも及ぶ壮大な一代記を描いた映画『国宝』。公開から口コミが絶えず、8月3日までの59日間で観客動員数604万人、興行収入100億円を突破し、2025年公開の実写No.1(※興行通信社調べ)を記録している。

「100年に一本の壮大な芸道映画」と原作小説を書いた吉田修一をうならせる映画「国宝」(李相日監督)。

任侠(にんきょう)の家に生まれながらも歌舞伎役者の家に引き取られ、希代(きだい)の女形になった主人公喜久雄を演じた吉沢亮(31)は「僕の今までの役者人生の集大成。僕の代表作となってくれたらうれしい。」と本作品への並々ならぬ思いを語った。

出演オファーを受けたときのことを、吉田の原作を李が実写化した映画「怒り」「悪人」を挙げながら、「どちらの作品もとても好きだったので、光栄という思いが強かった。歌舞伎のことを詳しいわけではなかったので、分からなからこそやってみようと思えた。」と振り返った。



上方歌舞伎の御曹司に生まれた俊介(横浜流星)と、九州の任侠の家に生まれながら父を亡くし、美貌と踊りを見込まれて部屋に喜久雄(吉沢亮)。

公私ともに切磋琢磨(せっさたくま)し、成長する二人。

だが、丹波屋・花井半二郎の休演で、半二郎は代役に息子俊介ではなく、喜久雄を選ぶ。そこから二人の運命は、思わぬ形に変転してゆくという物語。

1年半の稽古を費やしたという2人の主役の歌舞伎演技が称賛されている。「素人目には本物に遜色ない」という向きもあるようだが、当の2人が謙虚に表明しているように、いくら一年半かけても本職にはなれない。

ポイントは本物であるよりも、いかに映像の素材として切り取られるかで、選択と編集の妙は監督にかかっている。

また、歌舞伎を演じる喜久雄、および俊介を見せるのであって、2人は見事にそれに応えていた。

本職が自然に演じたならば、その要素は流れがちになってしまったかもしれない。その計算も監督にかかっている。

大河の趣きすらある小説を、映画はかなり絞り込んで脚色している。3時間かけて描き切れない部分は出てくるので個別の逸話の行方よりも、圧倒的な没入感を核として、映画は映画で、小説とは別に見た方がよいだろう。